
クリスマスパーティー

En

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスパーティー

【Nコード】

N7977Z

【作者名】

En

【あらすじ】

クリスマスパーティーと
中止の電話と
「あいつ」

十八禁要素皆無だから張りなおします

（前書き）

クリスマスが憎くて書きました

「悪い。今日はちよつと無理になった」

友人に数ヶ月前から予定していたクリスマスパーティーをドタキャンされた。

本来なら一人いなくてもパーティーは出来るが今回の会場はそいつの自宅の予定だったので参った。

昨日まで家族に「クリスマスは大学の友達の家でパーティーするから」なんて言つてただけに家には居づらい。

「何でだよ！まさか彼女でも出来たのか！」

「ごめん。そんな感じ」

「ぽつと出の女と俺たちの友情とどっちが大事なんだよ！」

「あいつは怒らせたら怖いから、痛い！ごめん！ごめんなさ」ツーツー

「切りやがった…」

「どうするよ？カラオケでも行く？」

「クリスマスだからどこにも入れないかも…。今更、家に帰れねえし」

「一人暮らしなのって三人の中じゃあいつだけだし…。てか雪降つてきたぞ！」

神田は酷く怒っていた。

「あいつ」はこうなる可能性を承知で彼女との性夜を選んだのだ。だから「あいつの家に行かないか？」なんて提案も気にする事なく出来た。

「良いね！」

「だろ！？あいつのパーティー邪魔してやろうぜ」

パーティーを突然断つた復讐としては最高だと思った。

どうせ「あいつ」は彼女と自宅にいるに決まってる。

善は急げ、だ。

いなかった。

「何！？何なの！？彼女の家なの！？彼女も一人暮らしなの！？」

木之本が吠える。

雪が積もり出した。

このままではまずい。

聖夜に天からお迎えが来る。

「もう帰ろうぜ」

木之本の言葉に賛成するしかない。

流石に死にたくないし

「そうだな」パラピレポレパラ

「あいつ」の携帯からだ。

取り敢えず文句の一つでも言おうと思い、出る。

「あ、神田さんですかー？」

女の声だ

「あいつ」の彼女か？

「はい、そうですけど。あいつの彼女さんですか？」

「はいそーです。オイ、カエセ」

「えっと。どうしました？」

自慢か？

「あの、今からこっちでパーティーしませんか？ ヤメロ、バカゲ

エ

「いいんですか！？」

自慢か、とか思ったことを心の中で謝罪する。

「寒いでしょうし、すぐ近くですから。ゼツタイクルナヨ！」

「えっと、どこですかね？」

「昔、小学校があつた所です。じゃあまた後で」ツーツー

「あいつ」の彼女は良い人だ。

それにひきかえなんだ「あいつ」は！？

ドタキャンしたくせに来るなだと!?

「どうした?」

「あいつの彼女の家でパーティーしよう、と彼女さんが」

「マジで!??え?どこ?」

「前に小学校があつた所だつて」

「え?あいつの彼女の家つて金持ち!??」

「かもな。早く行こうぜ」

俺たちは雪の中を駆け出した。

「ここか…」

暗くてよく見えないが確かに大きな建物がある。

「セレブじゃん!あいつ逆玉!??」

羨ましい限りだ。

本当に「あいつ」にはもったいない。

性格も良いし。

「さ、行こうぜ」

「あいつから彼女奪つてやろうぜ」

馬鹿な会話をしながら、建物に近づく。

入り口まで来るとその異常な大きさが気になる。

これがセレブなのか。

「こんばんは」

俺たちは入り口を開けた。

そして「何か」に捕まった。

二人いっぺんに、だ。

「捕まえた〜」

「え！？」

そしてその「何か」は巨大な手だと気づいた。その手が最近話題になっていた「ファルコの最終兵器だった」Xのものだと気づいた。

「えー！？」

「いらつしや〜い。あれ？」

木之本は気絶していた。

これでは彼女を奪うとかは無理そうだ。

「だから来るなって言ったのに…この馬鹿！」

「公平！？」

公平は左手に捕まっていた。

神田たちは右手。

自由なのはXだけ。

「はえ！？お前の彼女ってコレ！？」

握る力が少し強くなった。

「コレって…、僕は人間だよ？」

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

「はあ…」

公平は深い溜め息をついた。

Xは元々、神田たちを呼ぶつもりだったらしい。

「パーティーなのに二人きりは寂しいから」だそうだ。

公平は神田たちを助けるためにわざとパーティーをドタキャンした。Xが、公平の自宅の前で彼らを誘拐するのではと考えたのだ。

予想通りXは本来のパーティーの少し前に、公平の自宅の前に現れた。

そして、公平のドタキャン電話を聞いてまず、彼を誘拐した。

その後、公平から携帯を慎重に奪い、神田たちを招いた、というわ

けだ。

「おい…公平？俺たちどうなるんだ？」

「さあ…。さつきまで、あいつのジュースの入ったコップに落とされたり、そのままジュースを飲まれたりしてたけど…。まあ殺されはしないかな」

「かな」、この二文字がこれほど絶望的だった瞬間をまだ神田は知らない。

「次は料理にトッピングだよ」

「だって」

「ああ…何でそんなデカイ料理とか、ジュースがあるんだよ？」

「僕が脅したらすぐだったよ」

「Xは世界中のどんな集団が束になって、かかってきても負けないからな。知つてると思うけどこいつは地球上で最強なんだ」

公平が解説した。

神田は恥を忍んで家に帰れば良かったと思った。

「パーティー楽しみだね！」

クリスマスはまだ始まったばかりだ…

（後書き）

これでXにも家が出来ました！
ご飯も安心！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7977z/>

クリスマスパーティー

2011年12月25日17時45分発行